

令和4年度 自己評価計画書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考	
1 「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。  ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。生徒の主体性や対話力を高める指導法の研究・改善に努めるとともに、生徒1人1台端末を効果的に活用する。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。	① 授業において「本質に触れる指導」「生徒の主体性や対話力を向上させる指導」を目指す。そのために、「本質に触れる指導」をテーマとして生徒1人1台端末を活用する研究授業を、各教科や少人数のグループ単位で行い、授業改善に取り組む。	教務課	昨年度、前年のテーマである「生徒の質問力の向上」を引き続き継続するとともに、根拠まで踏み込み「本質に触れる」授業を目標とし、各教職員が、授業を工夫した結果、昨年12月の生徒による授業評価で、「授業が充実しているか」の全体平均値が3.64と高い値であった。 今年度も「生徒の主体性や対話力の向上」とともに根拠まで踏み込み「本質に触れる」指導法の研究・改善を継続することで、生徒の論理的思考力、判断力、表現力を高めたい。	【満足度指標】 生徒が「授業が充実している」と感じている。	「授業が充実しているか」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて、加えた値αを算出する。 ① 「よくあてはまる」 ② 「ややあてはまる」 ③ 「あまりあてはまらない」 ④ 「全くあてはまらない」 αの値が、 A 3.60以上 B 3.55以上 C 3.50以上 D 3.50未満	C・Dの場合、授業改善に向けた取り組みの再検討を行う。	生徒による授業評価を実施	
	② 生徒に、模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、習熟度別授業の実施や校内模試問題の研究により深い思考力の育成を進める。	進路指導課	3年生の難関10大学志望者数は、2月の進路志望調査によると278名で、例年より多い。 2年生の難関10大学志望者数も274名と、高い志望を維持している。	【成果指標】 東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が増加している。	東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が増加している。 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満	東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満	C・Dの場合、授業や3年間を見通した進学指導について、再検討を行う。	年度の当初に入試反省会・検討会を実施
	③ ホーム担任を中心に、年間6回以上の個別面接指導を実施し、文理選択を含め自身の進路について考えさせる。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導により、家庭学習の定着を図る。	1学年	生徒が新たな生活に1日も早く慣れ、学習と部活動とを両立できるような良い生活習慣、さらには基本的な学習習慣を身につけさせるべく指導を行っている。そのためにも、各面談で何を確認するのか、どのようなメッセージを生徒に伝えるのかについて担任で言葉をそろえ、目線を合わせたうえで指導していく。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施	
	④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、高い進路志望の確立を図る。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導を行い、家庭学習の定着を図る。	2学年	進路志望が例年に比べ低い傾向が見られたが、1年3学期頃より個人面談や学年集会等での意識づけを行った結果、高い進路志望へと変わってきた。今後は、高い目標を維持しつつ、その実現に向けた努力が持続できるよう、個に応じた面談を通して叱咤激励していきたい。また、成績概況として二極化傾向も見受けられるので、知的好奇心をくすぐるような指導テーマを設定し自発的な学習を促したり、より細やかな指導により自信を持たせながら力をつけさせたりしていきたい。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施	
	⑤ 授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削指導等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開していく。	3学年	学習習慣の定着と基礎基本の徹底を柱に指導してきたが、部活動との両立に悩み家庭学習の時間を確保できない生徒が見られる。校外模試では、成績上位者がいる一方で伸び悩む者もあり、成績が二極化しつつある。生徒一人一人の進路志望の実現に向けてさらに高い学力を身につける必要がある。	【成果指標】 難関10大学及び国公立大学医学部医学科の合格者数が多い。	難関10大学及び国公立大学医学部医学科の合格者数が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満	C・Dの場合、授業や補習、個人添削等の方法について、再検討を行う。	次年度の当初に入試反省会・検討会を実施	

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
2 探究活動プログラムの進化・発展に努める。 ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、2つのプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する。そして、その指導法を本県高等学校に波及させる。	① これまで取り組んできた科学的な課題研究活動を進化・発展させることで、生徒の多面的・多角的なものの見方、探究する力、思考する力、行動する力の向上を図る。また、普通科普通コース理型のプロジェクト型課題研究では、3年間を通じたプログラムを確立し、普通科文型やSGコースのプログラムとの融合を図る。	SSH推進室	文科省より、SSH認定校指定校として今年度から5年間の指定を受けた。昨年度の第IV期経過措置1年間を含めた通算19年間の研究開発に一区切りをつけ、これまでSSH事業で得られた様々な成果を県内外へ展開・普及することをミッションとしている。科学的な課題研究活動のプログラムはほぼ確立されているが、普通科普通コース理型に取り入れたプロジェクト型課題研究のプログラムについて、まだ改善の余地があり、系統的なプログラムの確立が必要である。今後はプロジェクトを通じた普通科文型クラスやSGコースの探究型学習プログラムと融合を図り、社会を意識した多面的なものの見方の育成に取り組みたい。	【満足度指標】 生徒が、「複数の視点で物事や課題を考察する」態度、「生まれた疑問や関心について、自ら解決しようとする」態度、「エビデンスをもとに考察する」態度、「必要だと気づいたことに対し自ら行動・挑戦する」態度を身につけている。	SSH・SGHアンケートにおいて、「複数の視点で物事や課題を考察する」態度、「生まれた疑問や関心について、自ら解決しようとする」態度、「エビデンスをもとに考察する」態度、「必要だと気づいたことに対し自ら行動・挑戦する」態度を身につけているかという各項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合の平均が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、計画の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
	② 課題研究を軸とした探究型学習プログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、グローバルリーダーに必要な種々の能力の育成を目標とし、その達成のために事業を展開する。	SGH推進室	5年間のSGH指定期間において、課題研究を軸とした探究型学習のためのカリキュラムを確立した。3年前にその指定期間が終了し、以後はそれまでの事業を継承しながら、より高度なプログラムへと発展させてきた。特に、SSH推進室と連携して実施する校内行事「探究の日」を学校全体の取り組みの1つのゴールに位置づけ、学年や文系理系の垣根を超えた探究学習のあり方を模索している。	【満足度指標】 生徒が、「目標の達成に向けて、考えや価値観の異なる他者とも協働しながら物事を進め、貢献する力」および「自分の考えを相手に論理的に表現する力」を身につけている。	『SG探究基礎』（1年）『NS探究α』『SG探究』（2年）『NS探究β』『SG探究活用』（3年）において、グローバルリーダーに必要な「目標の達成に向けて、考えや価値観の異なる他者とも協働しながら物事を進め、貢献する力」および「自分の考えを相手に論理的に表現する力」を身につけているかという項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」とする生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 ・挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高め心豊かで、グローバル人材となる資質を育成する。	総務課	昨年度10月に「生き方講演会」（元プロバスケットボール選手・Bリーグ「レバンガ北海道」代表 折茂武彦氏）を開催した。学びの継続性や試行錯誤を繰り返すことによって、学習法・練習法を確立し、自分自身を高め、磨くことができると感じた生徒が多かったため、講演会後の生徒アンケートでは、87.0%の生徒が「満足している」と回答している。勉強や部活動などへの取り組み方を考える際の大きなヒントや視点を得ることができた貴重な講演会となった。	【満足度指標】 講演会が、生徒にとって知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」＋「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、講師の選定等を工夫する。	生徒へのアンケート調査を実施
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、以下の挨拶指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・職員室等の入室マナー ・授業の開始、終了の挨拶	生徒指導課	登校時や校内（廊下等）では、自主的に挨拶をする生徒が増えてきている。しかし、来校者や地域の方々に対する挨拶については、まだ十分ではない。	【成果指標】 生徒が、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている。	「私は、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	生徒指導課	年間3回実施している「生活についてのアンケート調査」や担任による個別面談を通して、生徒が抱えるトラブルを早期に発見し、対応することができた。今後もいじめ問題やネットトラブルについて、研修会等を通じて教員が理解を深め、適切な対応ができる体制を確実に作っていく。	【成果指標】 互いに認め合い助け合う仲間づくりができる生徒が多い。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	生徒指導課	部活動加入率は高い。意欲的に活動し、有意義であると考えている生徒が多い。運動部は総体総合成績において公立高校1位である。文化部でも多くの部が上位大会に出場し、優秀な成績を収めている。	【成果指標】 上位大会（ブロック大会以上）に進出する部活動が増える。	県予選を通過しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	C・Dの場合、次年度へ向け、指導方法を工夫する。	県総体・総文等の結果報告による

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ・ゴミの分別・節水・節電	保健 環境課	探究活動等において学んだ、地球環境に調和した持続可能なライフスタイルについて、知識としてだけでなく、自分自身の生活の中で実践することが課題である。	【満足度指標】 生徒が、環境保全を意識して生活し、実践している。	校内の環境保全活動に努めていると答え た生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 取り組みの見直し・改善を 検討する。	生徒へのアン ケート調査を 実施
	⑥ 読書推進活動と学習環境の整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などにより、貸し出し冊数や入館者数の増加をはかる。	図書課	情報メディアの普及による読書離れの影響は本校生徒にも及んでいると推察されるが、普段からの読書啓発・読書推進活動はもとより、授業や教科学習と連動した読書や図書館利用の一層の充実を図ることが喫緊の課題である。	【成果指標】 1年間の図書の貸し出し冊数が増加している。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 4,500冊以上 B 4,000冊以上 C 3,500冊以上 D 3,500冊未満	C・Dの場合、 取り組みの見直しと改善を 検討する。	月毎の貸出数 調査を実施
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	教育 相談室	自分の進路に対する不安や学習面でのつまずき、人間関係の悩みに加え、コロナ禍による、長引く生活の制限も少なからず影響し、学校生活への意欲を失いかけたり、情緒が不安定になったりする生徒が見受けられる。	【満足度指標】 相談室を利用した生徒が、気軽に相談でき利用しやすいと感じている。	相談室を利用した生徒へのアンケート 「気軽に相談でき利用しやすい」の項目 で、「よくあてはまる」+「ややあては まる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 学年、関係各 課室と連携し て対策を検討 する。	来室者へアン ケート調査を 実施
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。  ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。	総務課	一昨年は「PTA総会」「生き方講演会」「いしかわ教育ウィーク」の合計が1,033名であった。昨年、「PTA総会」は中止、「生き方講演会」は保護者に向けては動画配信であった。保護者の参加を認めた「いしかわ教育ウィーク」は過去最高の308名の来校者があった。	【成果指標】 「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校合計数が A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満	C・Dの場合、 PTAと協力して 広報活動に努 める。	PTA総会 (5/14) いしかわ教育 ウィーク (11/1~7)
	② 理科科1,2年生、SSH生徒プロジェクト係、SS部及び科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実させることで、科学教育を推進する。	SSH 推進室	毎年理科科1年生が、「創立記念祭」に来校した小学生等に対して「理科教室」を開催し、参加者から好評を得ている。また、SSH生徒プロジェクト係、SS部及び科学系部所属の生徒が、金沢子ども科学財団と共催する「金沢泉丘サイエンスグランプリ」やサイエンスヒルズこまつ主催の「サイエンスフェスタ」に参加し、高校生と小中学生が協働活動することで、科学教育を推進している。今後は、活動の範囲を広げていきたい。	【満足度指標】 「理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム」に参加者が、大変良かったと感じている。	「理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム」に参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、 取り組みの改 善を検討す る。	参加者へのア ンケート調査 を実施
	③ 「学年だより」、「進路だより」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	1学年 2学年 3学年	定期的に「学年だより」「進路だより」を発行している。1年次に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者は81.8%であった。2年次に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が76.6%であった。	【満足度指標】 学校からのたより・通信等によって、保護者が学校の様子をわかっている。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、 内容の改 善を検討す る。	保護者へのア ンケート調査 を実施
5 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。	① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進める。これにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。	管理職	月に2度の定時退校日、部活動休養日、夏季休業中の学校閉庁日の設定や年休の積極的な取得呼びかけ、アプリを活用したアンケート集計、会議のペーパーレス化など効率的な業務の推進によって、教職員のワーク・ライフ・バランスを考えた働き方に対する意識が高まっている。時代の要請に応える教育活動を展開するために、採点ソフトの導入、ICTを活用した教材の共有や共同開発など効率的で密度の高い実践を推進し、教職員の意識改革を図る。	【満足度指標】 教職員が、ワーク・ライフ・バランスをとることに より、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	ワーク・ライフ・バランスをとることに より、気力、知力、体力が充実し、一層 効果的な教育活動を展開できていると回 答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、 内容の改 善を検討す る。	教職員へのア ンケート調査 を実施